

そこには、懐かしい風が吹き、懐かしい人の笑顔がある。

出演!!

# 見島のひとびと

# わたしの見島

「CINEMA塾」第一回作品

演出「CINEMA塾」+原一男  
製作「HAGI世界映画芸術祭実行委員会」

だれの心のなかにも島がある。



# 「個から」共同体へ

これまで執拗なまでに「個」にこだわってきたかにも見える原一男監督（ゆきゆきて、神軍）「全身小説家」が、「CINEMA塾」の塾生と共に共同体意識とドキュメンタリー映画の考察を实践すべく山口県萩市沖四十五キロに浮かぶ「見島」で初めて、共同体にカメラを向ける。

映画は見島全景の空撮に始まる。その後カメラは、新造高速船「おによつず」の雄々しく魅力的な航行を追い、入学式を迎えた学童や成人式を迎えた青年の楽しげな雰囲気に入り、塾生と島民との関係を描く「鬼ヨウズづくり」とヨウズ上げの胸躍るような抑揚感を捉え、そして見島の人々それぞれの「わたしの見島」を語る姿に真摯に向き合い「懐かしい人の笑顔を捉える」。

企画、制作から上映までの活動を人材育成制作集団「CINEMA塾」と映画祭実行委員会、萩市等が連携し共同体として支え、完成した映画「わたしの見島」は、映画づくりにカメラの前の対象としてだけでなく、カメラの背後の共同体を知ることも重要であると問いかける日本映画では初めての試みである。

## わたしの見島

「CINEMA塾」第一回作品



演出 「CINEMA塾」・原一男  
制作 HAGI世界映画芸術祭実行委員会  
撮影 原一男  
録音 川嶋一彦  
編集 岡安フコトシユン  
構成 小林隆雄  
音楽 田村信一  
題字 二輪龍作  
配給 「わたしの見島」製作上映実行委員会  
1999年16mmカラー 100分

「CINEMA塾」は、九五年八月の第二回HAGI世界映画芸術祭で新しい時代の映画人を育成する目的で、塾長の原一男の「活動屋宣言」を受け活動を開始した。塾長の原は日本のドキュメンタリー映画を代表する監督である。彼は言つ、今、日本映画は低迷している。それは日本国自身が低迷しているという事だ」と。

また、六〇年代、七〇年代のエネルギーを持つ活動屋魂を引き継ぐ映画人を育て、我々が学んだことを伝えたい」と、塾開講時に語った。塾の課題は、日本の根底にある共同体意識の考察と、映画における「ドキュメンタリー」とフィクション、そのリアリティ」の考察であった。その後九六年「プロデューサー論」、演出論、九七年「助監督論」をメインに取り組み、そのテーマの实践として九八年「CINEMA塾」夏期集中合宿にて萩市の離島・見島で制作されたのが「わたしの見島」である。一九九九年夏に第一回「CINEMA塾」作品として完成させた。



いまという時代の、ひとつの息づかいの正確な記録。

佐藤忠男（映画評論家）

見島は山口県の萩市の沖の島である。小さい島ではあるがそこには漁業も農業もあり、小学校も中学校もあって、立派にひとつの社会が形成されている。問題は、その社会が、過疎化の進行によって共同体としての機能にいろいろの支障が生じてきていることである。若者は高校進学を機会にほぼみんな島を出てゆき、若者がいなくなれば島の行事もときたりどおりにはできない。どうしたらいいか。

こうしていま、ひとつの共同体がそのありかたを変えようとしている。どうしようもなく変わりつつあるのだが、どう変わるべきかみんなで悩んでいる。その悩み方の全体を丸ごとらえようとしているのがこの映画である。島じゅうのあらゆる立場の、できるだけ多くの人々たちとつきあって、いまという時代のひとつの息づかいを正確に記録しようとするのだ。丸ごと、というところが、これまでちよつとなかったところで、その意欲が生新さといういしさをもたしている。

## 「CINEMA塾」とは